

〈広場の造形〉

美しい驚き 泉谷淑夫の万華鏡世界

泉谷 淑夫



美しい驚き
泉谷淑夫の
万華鏡世界

私の絵画制作の特徴は、テーマと技法の一貫性と表現領域の多様性にある。総合的なテーマは「美しい驚き」であり、技法は油彩で筆触を残さない描き方である。この二つは絵画を志した20歳の頃から変わっていない。理由はそれが私に合っていたからである。一方、表現領域は構想画、風景画、静物画、動物画、名画のパロディと多岐に渡っている。私には描きたいものがたくさんあり、技法の実験よりも内容の追求に重きを置いた結果である。つまり私の関心事は常に「何を描くか」にあったと言える。今回の誌上ギャラリーでは、そのような私の表現に自ら「万華鏡世界」と命名し、一部を紹介させていただく次第である。

1. 文明批評

私が絵画制作を始めた1970年代の日本は、高度経済成長の副作用としての公害問題が顕著になった時代で、文明の負の側面が浮き彫りになった。「時代の証言」としての絵を描こうと決めていた私は必然的にこの問題を取り上げるようになり、大作では「文明のパラドックス」が私の絵のテーマとなり、メッセージとなった。



《旅行者》 1984年
145.5×145.5cm



《展气楼》 1978年
130.3×162.1cm



《失乐园》 1979年
130.3×162.1cm

2. 羊の世界 南瓜

1986年に「羊」が私の絵に登場するようになると画風が一変した。ストレートな文明批評からオブラートにくるまれたメルヘンチックな寓話的表現への移行である。「羊」は組織に管理される現代人の暗喩であり、羊飼いは迷走するリーダーである。羊との組み合わせでしばしば登場する巨大な南瓜は、その形状から自然の豊かな恵みと内包された甚大なエネルギーを私に感じさせてくれるモチーフである。



《Daylight Dream》 2007年
162.1×162.1cm



《顯現》 2002年
162.1×162.1cm

3. 羊の世界 13 匹

2000年代になると「羊」は躍動するようになる。この現象を私は「バロックが来た」と称したが、描かれる「羊」も大きくなり力強さが増した。大作に登場する「羊」の数は多くの場合13匹だが、これは西洋文明を代表する人間集団として「イエスと12人の使徒たち」を重ねているからである。西洋ではアンラッキー・ナンバーの13が、10月13日生まれの私にはラッキー・ナンバーであるという逆説も楽しんでいる。



《雲界》 2009年
162.1×162.1cm



《EMERGENCY》 2016年
162.1 × 227.3cm



《昇天》 2007年
162.1 × 227.3cm

4. 羊の世界 宇宙飛行士

近年は「羊」の絵に宇宙飛行士が登場することが多い。宇宙飛行士には現代の「羊飼い」としての役割を担わせているので杖を持たせている。またロボットのような非人間的な外見をしていて動きも鈍く、ぎごちないところから、「羊」を導くべき存在がヴィジョンを失い迷路に入り込んでいる様子を表している。



《SPECTACLE》 2019年
227.3×162.1cm



《WANDER》 2015年
162.1 × 227.3cm



《白日梦》 2019年
181.8 × 290.9cm

5. 名作との戯れ ミレーの《落穂拾い》

名作のパロディは取り上げる作品が有名なほど効果がある。ミレーの場合は《落穂拾い》である。《落穂拾い》に描かれた「かがんだ人物像」に私は強く惹かれた。その姿に私は「苦難に耐える不屈の反骨的精神」を感じ取り、そこから強いメッセージが生まれると信じ、いくつかのパロディを制作した。



《危険な遊戯》 2006年
90.9×60.6cm



《愁傷のモニュメント》 1976年
97.0×145.5cm



《探す》 1988年
72.7×72.7cm

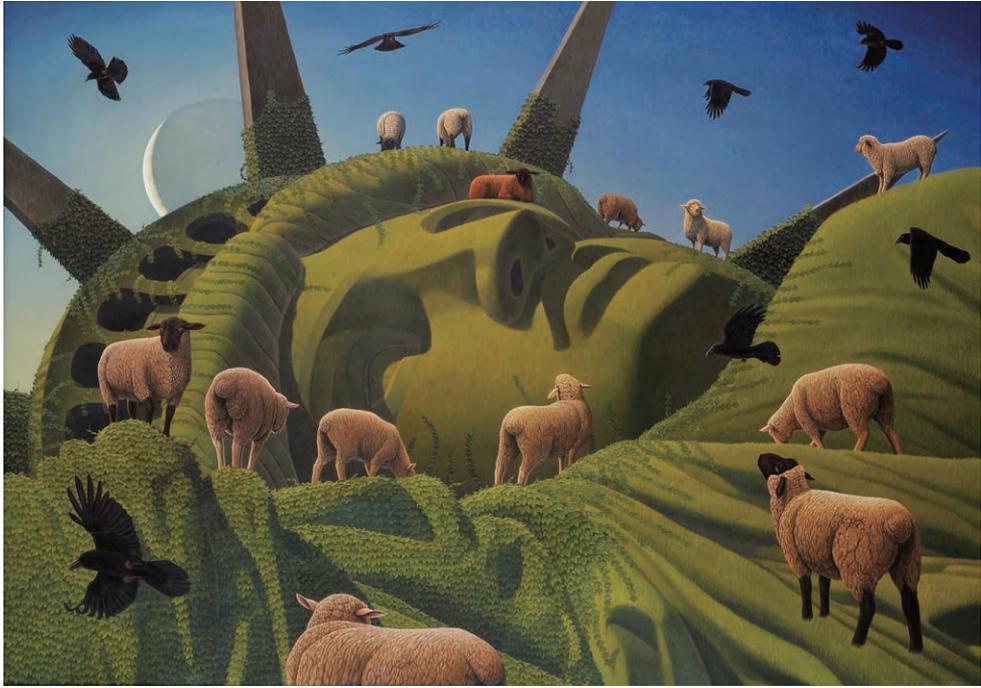
6. 名作との戯れ 自由の女神

「自由の女神」は言うまでもなく大国アメリカのシンボルである。しかしベトナム戦争以降、その威容には影が付きまとうことが多くなった。「9.11」はツインタワーだけでなく、アメリカの安全神話そのものを崩してしまった。その後のアメリカは大いなる迷走の最中にある。私が「自由の女神」を絵に描こうと思ったきっかけは、高校時代に見たSF映画の『猿の惑星』第1作のラストシーンの記憶が強烈だったからで、モニュメントは文明批評のかけがえのないモチーフであることに気付かされた。

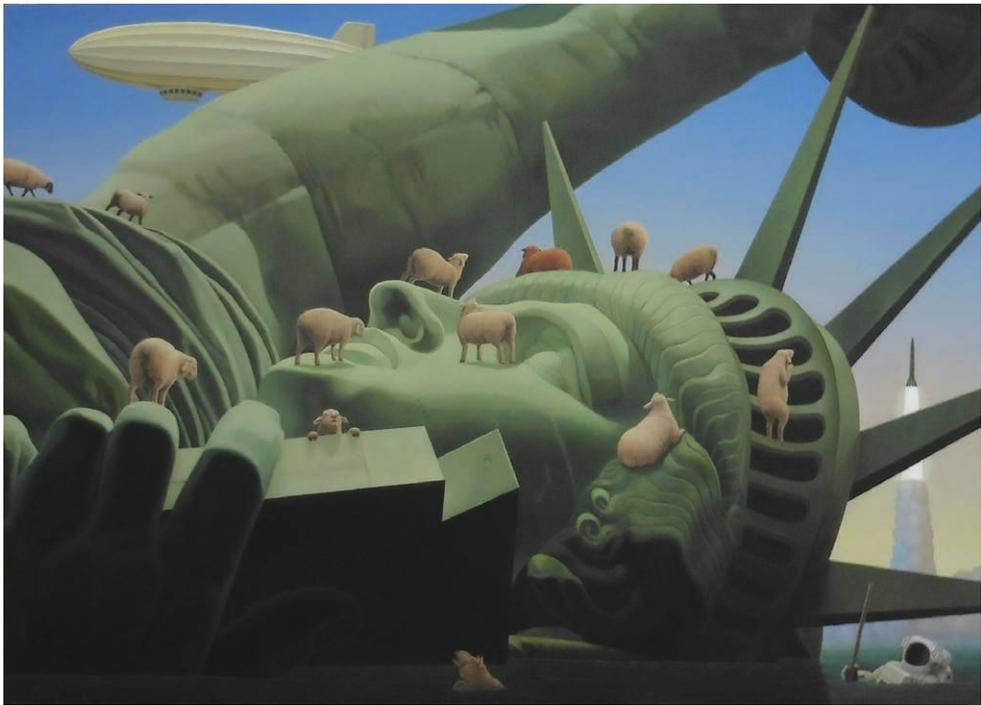


《三つの自由》 2011年

162.1×227.3cm



《幻影》 2009年
162.1 × 227.3cm



《漂流》 2022年
162.1 × 227.3cm

7. 名作との戯れ フェルメール (1)

フェルメールの絵は静謐そのものである。窓からの光が注ぐ室内に人物が佇んでいる。そこには動きの要素は少なく、子どもや動物が登場することもない。そんな聖なる空間にちょっとしたいたずらを仕掛けてみた。題して「フェルメールの絵に忍び込んだ猫たち」。フェルメールの絵の雰囲気を壊さずに、私の飼い猫たちを絵の中にこっそり入れてしまおうという企みである。



《画室》 2013年
162.1×162.1cm



《士官のいる窓辺》 2014年
40×20cm



《手紙を読む婦人のいる窓辺》 2014年
40×20cm

8. 名作との戯れ フェルメール (2)

「フェルメールの絵に忍び込んだ猫たち」のシリーズは評判が良かったので、その後正方形の画面に女性の衣装と猫を組み合わせた第2シリーズを展開した。その最後の絵を描いている時に思いついたのが《牛乳を注ぐ女》のパロディで、題名は《牛乳を注ぎ続ける女》。350年間も注ぎ続けていたらこうなるだろうという馬鹿馬鹿しい妄想を絵にしたところ、これが大いに受け、私のパロディの代表作となった。



《牛乳を注ぎ続ける女》 2019年
33.4×33.4cm



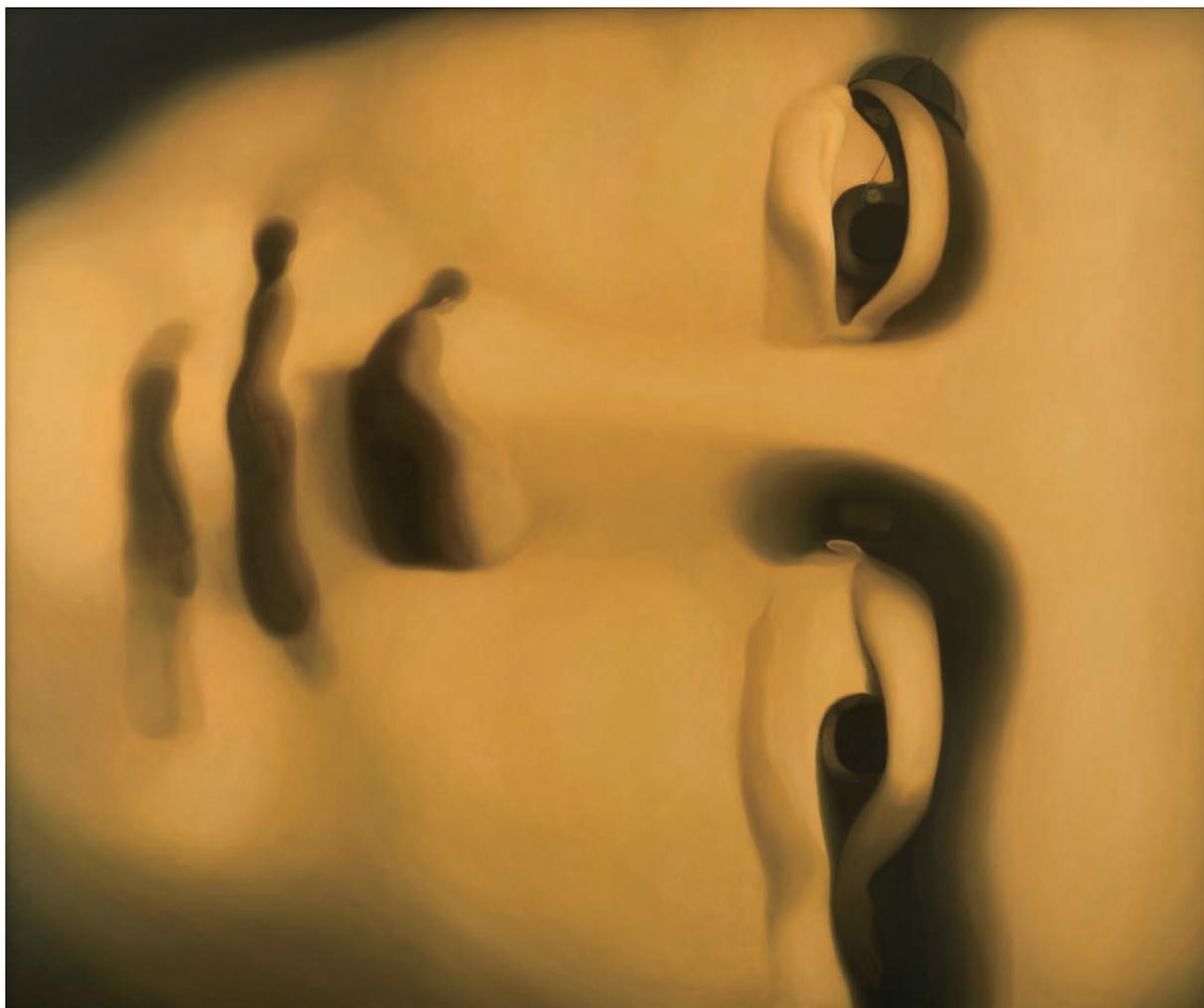
《居心地のいい場所》 2018年
33.4×33.4cm



《くつろげる場所》 2018年
33.4×33.4cm

9. 名作との戯れ モナ・リザ

レオナルドの《モナ・リザ》以上に有名な絵はないので、パロディにしない手はない。謎の微笑を浮かべたあの顔はもちろんのこと、組んだ両手も人々の脳裏に焼き付いている。そこでこの強烈な先入観を利用して、複数の人影でモナ・リザの顔に見せたり、モナ・リザの顔を描かずにモナ・リザと分からせたりするアイデアを思い付いた。これらの知的な遊びは多くの人に喜ばれる結果となった。



《幻視》 2012年
162.0×194.0cm



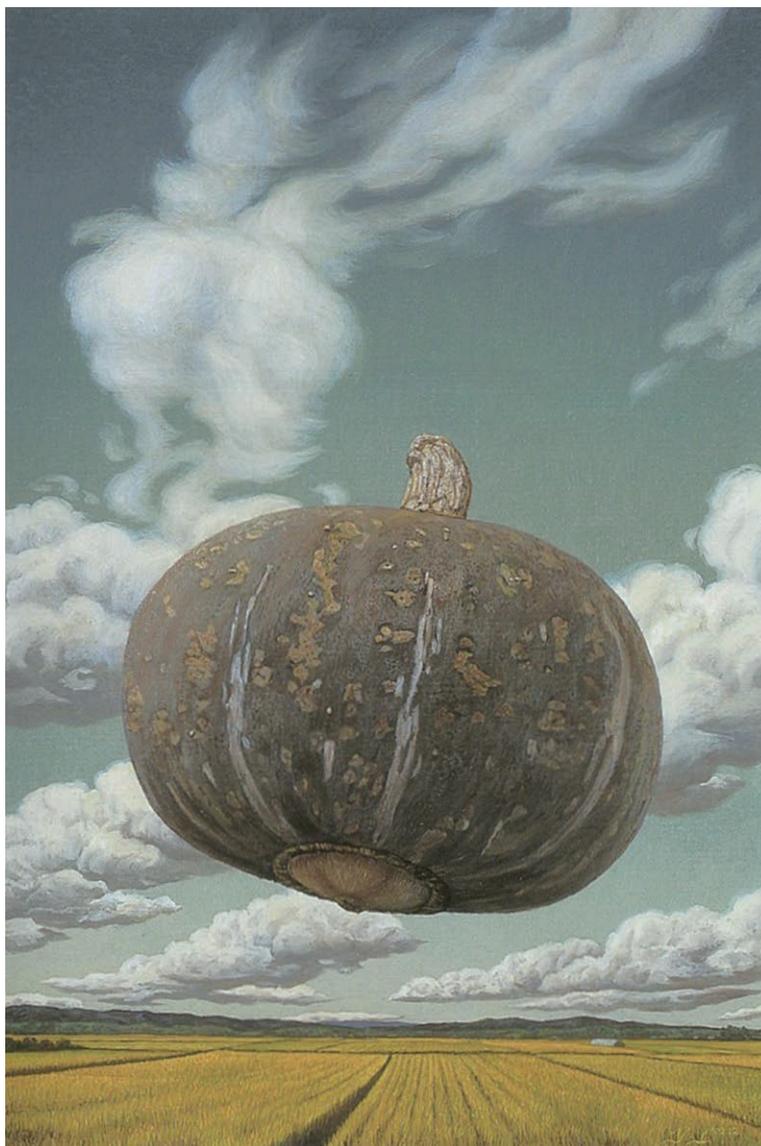
《世界一有名な婦人に抱かれた猫》 2016年
31.8×40.9cm



《ジプシーのいる風景》 1978年
31.8×40.9cm

10. 超静物画

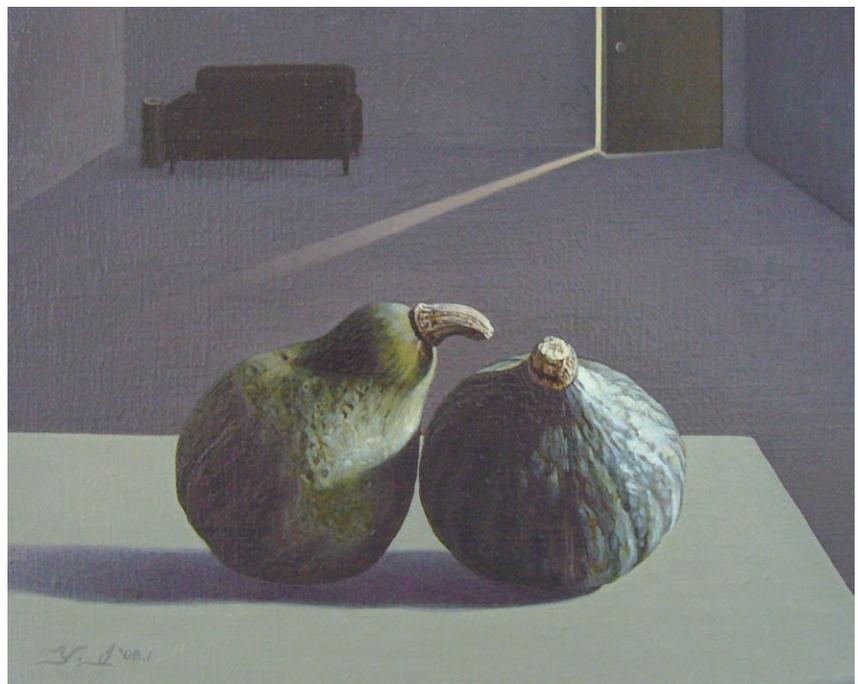
私は静物を写實的に描くのが好きである。よく描くのは玉ねぎや南瓜、ザクロやリンゴなどの「自然の恵み」で、エネルギーを感じさせてくれるものたちであるが、途中から全く異質な考えが浮かんで来て、絵が思わぬ方向に行ってしまうことがある。それは描いている対象が持っている「秘められた力」が成せる業かもしれない。



《収穫》 2002年
40.9×27.3cm



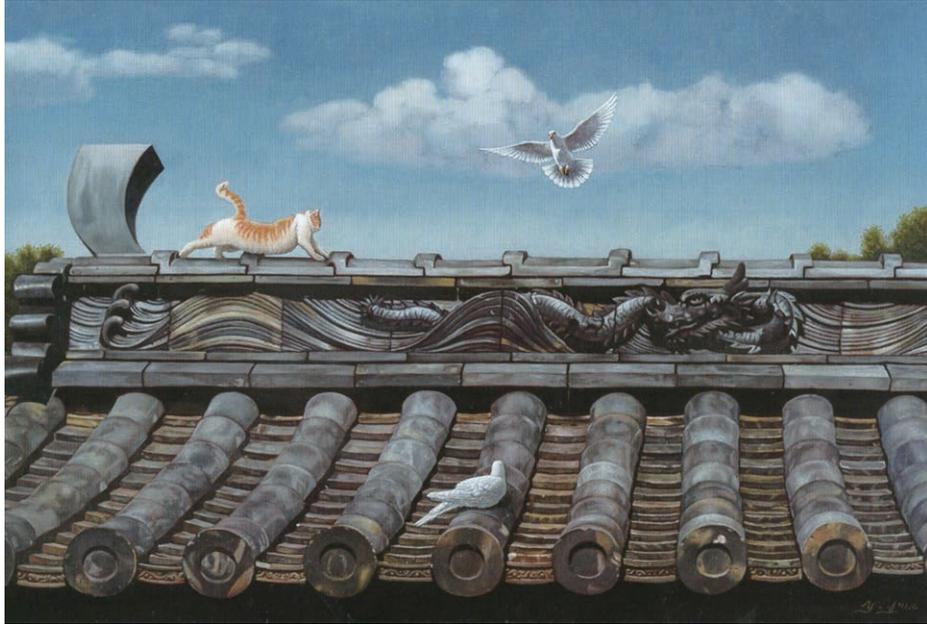
《丰稔》 2002年
31.8×40.9cm



《密谈》 2008年
22.0×27.3cm

11. 猫の世界

猫は美しく、神秘的で、絵のモチーフとしても申し分ない。藤田嗣治の例が良く知られているが、猫と絵描きは相性がいい。そもそも「猫」という字は「描」という字によく似ている。また猫と絵描きは共に言葉以外の手法で世間に何か言おうとしている点も同じである。



《PEACE - 覺上の休戦-》 2011年
40.9×60.6cm



《満月の舞台》 2008年
15.8×22.7cm



《夢の椅子》 2012年
33.4×33.4cm



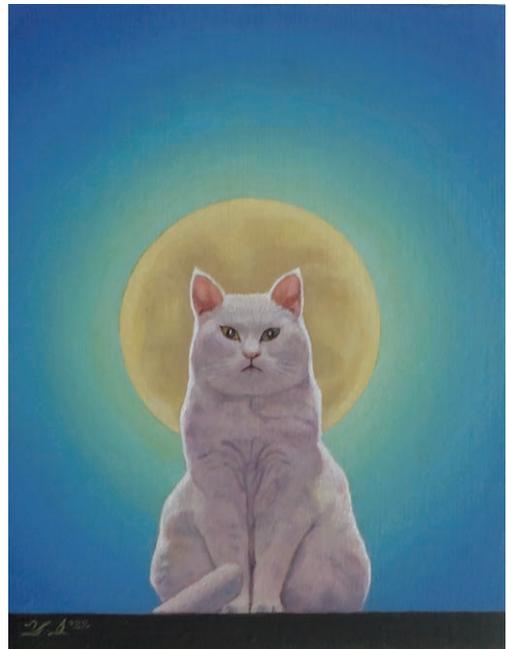
《至福》 2019年
尺15.0cm



《オッドアイ》 2010年
尺15.0cm



《On the Piano》 2015年
33.4×21.1cm



《降臨》 2022年
17.9×13.9cm

12. 風景画

私は元々風景画タイプの画家である。二次元の平面上に三次元の空間をイリュージョンとして描き出すのが好きなのである。自然には空、雲、杜、丘、道、樹など描きたくなる魅力的なモチーフが満ちている。それらが様々な光を浴びながら、存在の正当性を主張している。私は眼に成りきって描くことで、それらと一体となる。至福の時間である。



《静かな入江》 2011年
90.9×60.6cm



《樹の惑星》 2012年
40.1×112.0cm



《光の園》 2007年
40.9×60.6cm

13. 天井画対作 龍神と鳳凰

縁あって笠岡市の神島にある圓明山法華寺の本堂に天井画対作を描くことになった。日蓮聖人の降誕八百年を祝う記念事業である。天井画制作は初めてであるが、長く絵を続けているとこんなこともあるから不思議である。私が設定した天井画のコンセプトは「自然と人間のエネルギーをめぐる相克」である。抑制の効かない人間のエネルギー開発は危険な状態を生み出し、自然が統御してきた絶妙なバランスを崩そうとしている。それに対する私なりの思いを龍神と鳳凰という超自然的な存在に託し、描いたものである。



《龍神雷光図》 2022年
182.0×234.0cm



天井画情景写真



《蓮華鳳凰図》 2022年
182.0×234.0cm

■泉谷淑夫 略歴

- 1952 神奈川県伊勢原市に生まれる
- 1975 横浜国立大学教育学部美術科卒業（國領経郎教室）
- 1975 平塚市立大住中学校に赴任
- 1977 第12回神奈川県美術展大賞受賞
- 1983 横浜国立大学大学院教育学研究科修了（國領経郎教室）
- 1984 第30回一陽展一陽賞受賞
- 1985 横浜国立大学教育学部附属横浜中学校に赴任
- 1994 第37回安井賞展入選
- 1994 岡山大学教育学部に赴任
- 1994 第1回金山平三賞記念美術展出品（兵庫県立近代美術館）
- 1995 第3回現代の美術・今日の状況展出品（東広島市美術館1999、2003も）
- 1998 第8回花の美術大賞展大賞受賞
- 1998 第1回トリックアート大賞展大賞受賞
- 1999 泉谷淑夫作品集『楽園の寓話』刊行（エルテ出版）
- 2001 第47回一陽展 安田火災美術財団奨励賞受賞
- 2002 第53回岡山県美術展大賞受賞
- 2002 第6回小磯良平大賞展優秀賞受賞
- 2007 伊勢神宮式年遷宮記念美術館特別展『月・歌会始御題によせて』出品
- 2007 泉谷淑夫作品集『羊の惑星』刊行（エルテ出版）
- 2010 『アーティストファイヴ岡山2010』洋画部門代表出品（天神山文化プラザ）
- 2014～17 『筒井康隆コレクション』全7巻の装丁・装画担当（出版芸術社）
- 2015 安芸高田市・八千代の丘美術館で『美しい驚き・泉谷淑夫展』開催
- 2015 『公募団体ベスト・セレクション2015』出品（東京都美術館）
- 2016 泉谷淑夫作品集『美しい驚き』刊行（出版芸術社）
- 2017 岡山県奈義町現代美術館で『美しい驚き・泉谷淑夫展』開催
- 2018 『美の巨人たち』に尾形光琳の《紅白梅図》屏風の構図解説で出演
- 2018 岡山大学を定年退職 大阪芸術大学美術学科に赴任
- 2018 泉谷淑夫画業50周年記念エッセー『二兎追流』刊行（日本文教出版）
- 2019 第35回記念個展『美しい驚き・泉谷淑夫展』開催（横浜高島屋美術画廊A）
- 2019～20 池田20世紀美術館で『美しい驚き・泉谷淑夫の世界』開催
- 2021 平塚市美術館への3点の作品寄贈で紺綬褒章受章
- 2020～22 日蓮聖人降誕800年を記念した笠岡市の圓明山法華寺本堂天井画対作を制作
- 2023 第40回記念個展『美しい驚き 泉谷淑夫 羊のいる世界 羊のいない世界』開催
(岡山県天神山文化プラザ展示室提案事業としての回顧展)
- 現在 大阪芸術大学客員教授 岡山大学名誉教授 一陽会運営委員 岡山県美術展審査委員



泉谷淑夫
オフィシャルサイト